
アイドルの恋愛戦争

小説初心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルの恋愛戦争

【Nコード】

N2110BA

【作者名】

小説初心者

【あらすじ】

アイドルとの恋愛を書いたものです。
ぜひ見てください。

1話 出会い

「みなさん、盛り上がってますか〜！」

「いえ〜い」

「それでは新曲いっちあいますよ。聞いてください。『恋するアイドル』！〜！」

「智、お前のお蔭で念願のコンサートに行けたぜ。ありがとうな。」

「気にするなよ、蓮司。お前が行くって言わなかったら俺もいけなかったしさ。」

今日は俺と蓮司で初めてのコンサートに行った。しかも、中々チケットが取れない超人気アイドル『フェアリーキュア』コンサートだった。そんなコンサートに行った後のおれたちはテンションが高かったの
で夜まで遊びまわっていた。

「そろそろ12時なるから帰らねえか？蓮司。」

「そうしようか。じゃあ、また大学でな。」

こうして蓮司と別れて帰ることにした。

裏路地に入ったところで女の子がうずくまっていた。

「・・・どうしたんだろうか。もしかしてレイプにでもあったのだろうか？」

「いやいや。服は乱れてないから大丈夫だろうな。でも一応声をかけるか。」

「君、こんな所でどうかしたの？」

「え〜と、まあ迷子になってしまっただけ・・・。」

女の子は立ち上がってこっちを向いた。

身長は140後半位で顔から見て中学生くらいかな。しかもかなりかわいい顔をしている。

「そうなんだ。中学生なんだからこんな時間は危ないよ。」

そしたら女の子は顔をムツとさせた。

「私はこれでも20歳です。」

「えっ！！マジですか。すみませんでした。」

俺はびっくりしてかなりの勢いで謝った。

そしておすおすと顔を覗いた。ここであることに気が付いた。

この顔どっかで見えたことがあるんだよね。んう！！待て待て待て！もしかしてフェアリーキュアのリーダーの高波愛奈じゃないか！！

「なんで高波愛奈がこんなところにいるんだ？」

かなり興奮しているのを落ち着けて聞いてみた。

「私、コンサートの後マネージャーとけんかして飛び出してきたんです。

でもここには初めて来たし、携帯も財布もないので困っていたんです。」

「ふうんそうなんだ。それなら俺が3択選ばしてやるよ。1、俺が金を貸すからタクシーで帰る。

2、俺の部屋で休んで始発の電車で帰る。3このまま迷い続ける。どれがいいかな。」

「それなら、2番をお願いします。」

「うん、わかった。今からタクシー呼ぶか・ら・．．．ええ〜!!
いまなんて言った?」

俺はもちろん1番を選ぶと思っていたから、もう財布に手をかけていた。

だが予想外の答えにびっくりした。

「だから、2です。だってタクシーだとかなり高いですよ。

それにこんなところにいたらどうなるか・．．だから2をお願いします。」

「わかったよ。それならついてきてくれ。」

こうして俺はアイドルを部屋に連れて行くことになった。

20分くらい歩いたらアパートが見えてきた。

「あそこが俺が住んでいるアパートです。」

「ふん。そうだ、聞きたいことがあるんですけど……」

「なんだい？」

愛奈は少しもじもじしながら聞いていた。

「私たちフェアリーキュアの7人で誰を推しているんですか？」

あゝ、推しメンのことね。それなら答えは簡単だな。

「俺は、高波愛奈さん。あなたが推しメンです。」

「本当ですか？」

「嘘だと思うなら部屋に入ってみるといい。」

そう言い部屋のカギを開けた。

愛奈は部屋に入って行った。

入ったらあつ、という声を上げた。

見た所にはグッツがたくさんあった。

その8割が愛奈のグッツだった。

「本人を前にすると恥ずかしいけどこれでわかったかな？」

「はい、とっても嬉しいです。」

「それじゃあ、ベッドに座っというて温かい飲み物出すから。勘違いするなよ。」

部屋が狭くて座る物がなくてだからな。」

ココアを作って出してあげた。

その時、グ〜と愛奈から音がした。

「はは、お腹がすいているんですね。朝の残りでもいいなら今出しますから。」

「はい、ありがとうございます。」

俺は朝の残り物のパスタと肉じゃがを温めて出した。

「不味くはないと思うから。」

「わ〜い。とても美味しそうですね。いただきます。・・・美味しいです。これ手作りだなんてすごいです。・・・あれ？お腹なってますよ？食べないんですか？」

愛奈が食べている途中で俺のお腹が鳴ってしまった。

夜ご飯はまだだったからな。仕方がないか。

でも・・・

「いや〜、言いにくいんですけどそれが最後なんですよね。」

「えっ!」

そしたら愛奈は泣き出した。

「どうしたんだよ。なく必要ないだろう?」

「だって、だって、ヒッグ・私のせいで智さんが食べられないんですから。」

「そんなこと愛奈さんが気にする必要ないよ。だって俺なんかより愛奈さんの方が

いろいろあつて疲れているだろ?それだったら愛奈さんを優先して当然じゃないか。」

愛奈を落ち着かせるために頭を撫でてあげた。

愛奈がビクツとしたけどすぐに泣き止んで笑顔になった。

「今のは嫌だったかな?」

「いいえ。初めてでびっくりしただけです。もっとしてください。」

「あとでならいいよ。皿を洗って来るから。」

皿を洗いに台所へ行った。

戻ってくると愛奈はベットで寝ていた。

疲れていたんだろ?な。

そのまま寝かせてあげることにした。

俺が頭を撫でてあげると眩しいくらいの笑顔で寝ていた。

可愛過ぎるだろこれ。こんなかわいい童顔を見ていたらロリに目覚めるだろ?!!

どうにか自分を落ち着かせて壁にもたれ掛けて寝ることにした。

1話 出会い（後書き）

この作品がここでの初めての作品になりました。
読んでくれたみなさん、ありがとうございます。
ぜひ応援してください。

2話 初めてのキス

「ふうわゝあ。目が覚めちゃったな。まだ、朝の4時じゃん。まだ寝ようかな。」

うゝ、4月だっというのにまだ寒んだなこの時間は。」

そこでふと下を見ると智が寝ていた。

なんでそんなところで寝ているのかな？まさか私のためにそんなところで寝ているのかな？

うわあ、しかも毛布きてないし寒そうだな。どうしたらいいのかな？

「あつ、そうだ。一緒に寝てあげようかな。」

愛奈は毛布を持って智の隣に来た。

智に密着してから毛布を掛けた。

ふふふ^^あたたかいな智さん。男の人と寝るのって初めてだな。ちよつと浮かれながら寝ようとした。

愛奈が寝ようとしたときに智が起きてしまった。

なんだ？隣が温かいな。って愛奈さんが隣で寝てるじゃん！！

「愛奈さんなんで隣で寝ているんですか。」

「あつ、ごめんね起こしちゃったみたいですね。一緒に寝るの嫌でしたか？」

「そうじゃなくて、なんで隣で寝ているんですか。もし俺が悪い人だったら何されるかわかりませんよ。それにアイドルがそんなことしちゃ駄目じゃないですか。」

俺は怒っているように声を荒げていった。

愛奈はなぜ自分が怒られたかが分からず泣き始めた。

「だって・・・ヒッグ・智さんが寒そうだ・ウウ・ったし、智さんは優しい人だもん・・・ウツグ」

さすがにこのまま泣かしておくのもまずいと思い謝ることにした。
愛奈さんの頭を撫でながら

「怒ってごめん。俺のことを思ってしてくれたのに・・・。わかった、今日はこれで寝ようか。」

撫でていると泣き止んで笑顔で

「本当にいいんですか？」

つと聞いてきた。

「ああ、もちろんいいよ。アイドルと寝れるなんて本当はすんごくうれしいから。」

「やった〜。それなら・・・っえい。」

愛奈が智に抱き着いてきた。

俺は少し慌てながら聞いた。

「おい、抱き着いていいのかよ。」

「はい。だってこれの方が温かいですよ。それに好きだからいいんです。」

最後の方は聞き取れなかった。

「愛奈さんがいいならいいですよ。」

「あと、智さんにお願ひがあるんですけど・・・」

「なんだい？」

「その、私が寝るまで頭をなでなでしててください。」
顔を赤くして、おずおずと聞いてきた。

「わかりました。おやすみなさい愛奈さん。」

愛奈の頭をなでなでした。

されている間はずっと笑顔でいた。
3分くらいしたら眠ってしまった。

「寝るのが早いですね、愛奈さんは。寝顔が可愛過ぎる。やばい、
こんなの見ていると襲つかも。」

それにロリコンにも目覚めるかもしれない。」

そんな2つの衝動を抑えながらどうにか眠りについた。

朝に目が覚めたのは愛奈が先だった。

普段から仕事が忙しいから朝は早いのだ。

愛奈は智を起こさないように毛布から出て洗面台に向かった。

顔を洗って水を飲んだら戻ってきた。

朝はまだ寒かったのでまた毛布にくるまった。

よくよく考えたら男の人の寝顔を見るのは初めてだったのでじっくりと近くで見ることにした。

いびきも掻かず寝相も悪くない智の顔にどんどん顔を近づけて行った。

「ツチュ」

「§ § & 」

智の顔が少し動いたら智の頬にキスをしてしまった。

突然のことでびっくりして、顔が赤くなってしまった。

初めてしちゃったよ。キスを。どうしよう、起きてないよね・・・
そーと智の顔を見ると丁度今起きた。

「ううん。どうしたんだい？顔を赤くして。」

「いやいや、なんでもないですよ。それよりもそろそろ帰りたいんですけど・・・」

今のことを隠すために話を逸らした。

「わかったよ」

智はお金を出して、駅までの道の案内をした。

「それではありがとうございました。今度お金返しますし、お礼もしますから。」

「お礼なんかいいから。じゃあね。」

「オホむうなら。」

「こつして高波愛奈は帰っていった。」

3話 アイドルと

あのあとは大学に行った。

大学で授業を受けていたらメールが来た。

？こんな時間に誰からだろうか。しかも、登録してない人からか。教授に見つからないように携帯を開いた。

「嘘！！愛奈さん！！」

びっくりのあまり声を上げて立ち上がった。

「樋口君、まだ終わってないんだけど。」

「すみません教授。」

謝って座った。

隣の蓮司がこっちを向いて笑っていた。

あいつ絶対あとでシバイてやる。

メールの内容はこうだった。

「智さんこんにちは！メアドはこそつと貰っておきました。今週の土曜日空いてますか>」

ふん。多分、朝言っていたお礼のことだろうな。

一応暇なので「空いていますよ」と返信した。

すぐにまた返信が来た。

「それでしたら朝8時に東京駅に来てください。」

「わかりました」っと。

そのあとは、返信は来なかった。

土曜日、8時に東京駅に着いた。

駅を出たところで大きく手を振っている女の子を見つけた。

「とくもさくん、こっちですよ。」

「ごめんね、待たせたかな。」

「大丈夫です。今来ました。」

「良かった。今日は読んでくれてありがとう。」

「いえいえ、お礼ですから。今日は私たちのコンサートの後に街を案内しますから。」

そうか今日はコンサートがあったんだ。それより俺チケット持ってないし。

「チケットは用意しましたから大丈夫です。では、行きましょう。」

コンサート会場に連れて行ってもらった。
チケットを愛奈からもらい会場に入った。

「愛奈、今日のコンサートすごく良かったよ。何かあったわけ？」
終わった後の控室で同じグループの沢辺夏凜が声をかけてきた。

「そうですね。今日の愛奈先輩いつもよりも楽しそうでしたよ。」
後ろから橋本千穂も聞きに来た。

「何もないから。私、用事があるから先行くね。ばいばい^^」
ぼろが出ないうちに逃げることにした。

「「怪しいわね。」」

俺は裏口のところで待っていた。
20分くらいたったな。仕方がないか、忙しいだろうし。
立って待てなくなっただのでベンチの座ることにした。
裏口からはたくさんの人が出てきていた。
中にはフェアリーの中西希望や錦古里彩佳もいた。

「すみません、遅くなりました。」

愛奈が息を切らしながら走ってきた。

「全然大丈夫だから。それでは行きましょうか。」

そのあとは2人でウィンドウショッピングを楽しんだ。

そろそろお昼の時間になりましたね。どこに智さんを連れて行こうかな。

考えながら歩いていると私のお腹が鳴ってしまった。

「ふふ。愛奈さんお腹が空いているんですね。」

「えへっ^^すみません。今からお昼にしましょうか。行くのはメニューともよくいくお店ですから、楽しみにしててください。」

俺は店のディスプレイを見て唖ってしまった。

マジかよ。ほとんどが2000円以上じゃないかよ。学生の財布をなめんなよ!!

そんな感じで考えていたら横から愛奈が、

「大丈夫ですよ。私のおごりですから。」

「え! いいの? ありがとう。」

そして店に入った。

窓際の席に座ると、俺はオムライスを頼み、愛奈はボンゴレを頼んだ。

料理が来たので食べようとしたら電話が鳴った。

その電話は俺のではなく愛奈のだった。

「すみません。先に食べといてください。」

「うん、わかったよ。」

少し食べて待つて待つていたら、

「お隣いいよね^^」

女の人が隣に座ってきた。

隣を見て驚いた。

隣に来たのは、錦古里彩佳だった。

「やっぱりこのオムライスは美味しそうだね。・・うん、美味しいよ^^」

「待つてくださいよ。それ俺のですから。」

「気にしない、気にしない。」

「気にしなさい!!!」

愛奈が電話から戻ってきた。かなり怒った顔をしていた。

「なんで彩佳がいるのよ。」

「だって、愛奈がいるのを見つけたから。」

「じゃあ、なんで智さんのを食べているのよ。」

「ふうん、智さんっていうんだ。ねえ、私に食べさせてよ^^」

「なんでそうなるのよ!!!私だっけてもらってないのに!!!」

「いいじゃん別に。いい〜だ!」

2人の言い争いが続いた。

俺はどうやって抑えるか考えている話が付いたらしい。

「わかったわよ、彩佳。智さん、私たち2人にたべさせてください
^^」

2人でここにこしながら言ってきた。

こんなことしてるの見られたらどうするんだよ、と説得したが2人は、

「大丈夫、ばれないから。」

と言って聞いてくれなかった。

俺は粘ったが「愛奈みたいなかわいくない子じゃ嫌ですか?」と言
って涙目になっていた。

俺は仕方なく了承して食べさせることにした。

「わかりました。愛奈さん、あ〜ん。」

「あ〜ん。・・・美味しいです。」

笑顔に戻った。

横から彩佳が、ツンツンとして、口を開けて待っていた。

「はい、あ〜ん。」

「あ〜ん。やっぱり最高^^」

これが最後まで続いた。

俺はこれのせいで自分の分は食べられなかった。

2人は嬉し過ぎてそれに気が付いていなかった。

仕方がなく昼は我慢して2人のショッピングにつきあった。

「今日はありがとう、二人とも楽しかったよ。」

「それなら良かったです、智さん。」

「うんうん、私も楽しかったよ、智。」

いつの間にか彩佳からは呼び捨てになっていた。

「それじゃあ、またね。ばいばい。」

「ばいばい、智さん(智)」

俺は電車に乗った。

は〜。財布がさみし過ぎる。

今日は俺がお礼をしてもらうはずだったのに途中から2人のものを俺が買ってあげていた。

大学生の財布なんてたかが知れてるんだよ。あと3週間どう過ごそうかな・・・

でも、アイドルと過ごせたからいい。きっともう無いだろうし。

4話 ツンデレ

「智さんは、やっぱり優しかったな。こんなに沢山買って貰ったよ。」

2人はたくさん紙袋を持っていた。

しかもほとんどがブランド物の服だった。

これを買うために智は何回もATMに行っていた。

途中で何回も智は2人にばれないように嘆いていた。

「うん、確かにやさしいね。それに楽しかったもんね。」

そんな話をしながら今日を振り返っていた。

すると後ろから声をかけられた。

「あんだ達もしかしてあれが好みなの？顔もファッションも大したことなかったのに。」

「真奈美様じゃないですか。智さんは顔じゃありません。心ですよ、こ・こ・ろ。」

声をかけてきたのは佐崎真奈美だった。

「あんだ達は、ただ遊ばれているだけよ。アイドルなんだから気をつけなさいよ。それより早くいかないと仕事遅れるはよ。」

「あ！！忘れてた。愛奈、真奈美様、早く行きましょう。」

こうして3人は帰って行った。

「あのくそ店長め！！深夜のバイトは嫌だつて言っただろうが！！」

あれから1週間がたっていた。

2人からは全く連絡は来ていない。

まあ、それは当たり前か、とあきらめている。

そして今はお金がないのでバイト三昧の生活をしている。

「は〜。もう1時か・・早く帰って寝たいな。」

帰り道の途中の裏路地に入った時に女の子が蹲っているのを見つけた。

俺はびっくりして思わず、

「デジャブだ！！」

と行ってしまった。

向こうはこの声に気が付いた。

「やっと見つけたよ。あなたのせいで道に迷ったんだからね。」

よく見てみると佐崎真奈美だった。

「なんで真奈美さんがいるんですか？」

「あなたに用があるから来たのよ。それより、寒いし、疲れたの。」

早く行くわよ。」

なんだよこの強引な奴は、でも仕方がないこつこついうキャラなのは知っていたから。

「わかりました。付いて来てください。話は家で聞きますから。」

真奈美の前をスタスタと歩いて行った。
少し歩いたところで後ろから声をかけてきた。

「ねえ、疲れたんだけど。私をおぶって行ってよ。」

「俺だって疲れているんですけど。」

一応自分のことを主張してみた。
でも、どんどん顔が怖くなっていき睨んでくるので諦めた。

「はいはい、乗ってください。」

かがんだら真奈美は飛び乗ってきた。
するととびつきりの笑顔になって、

「ありがとうございます。早く行きましょう。」

はぐ、これが世に言うツンデレというやつなのか・・・
20分くらいしたらアパートに着いた。

アパートに着いたら智から降ろされた。

「温かい飲み物を出しますから待っていてください。」

「わかったわ。」

智はキッチンに向かっていった。

「ふうん。ここに愛奈が止まったのね。」

部屋は狭いけどきれいにされているのね。聞いてた通り愛奈のグッツが多いのね。あら、それ以外はほとんど私のグッツじゃない。

「ねえ智、私のグッツが多いけどなんでなの？」

キッチンからココアを持ってきた。

智からココアを受け取って聞いてみた。

「それはですね、元々は真奈美さんを見てからフェアリーが好きになったからです。真里菜さんのおとなな感じにひかれたんですよ。」

「ってことは元々は私が推しメンだったのね。」

そのあとも用事を忘れて話し続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2110ba/>

アイドルの恋愛戦争

2012年1月6日16時36分発行